

ニグロ・ルネッサンスの詩人たち

著者	赤松 光雄
雑誌名	神戸外大論叢
巻	12
号	5
ページ	59-76
発行年	1961-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001817/



ニグロ・ルネッサンスの詩人たち

赤 松 光 雄

ライト、エリソン、ボールドウィンを始め多数のニグロ作家の作品は現代アメリカ文学に極めて重要な位置を占めているが、「ニグロ・ルネッサンス」“The Negro Renaissance”は今日のニグロ文学隆盛の因となり、その発展を約束させた一時期である。

奴隷時代のニグロ人は集団として労働歌、靈歌、民謡、民話に苦難と願望を託したが、詩、小説、戯曲などの文学的表現はごく少数の特別な環境と才能に恵まれたニグロ人に限られていた。また解放後も彼らが置かれていた社会的悪条件にあって、20世紀初頭までは概して見るべき文学作品は期待出来なかった。詩の分野においても Phillis Wheatley (1753-84) Jupiter Hammon (1720?-1806?) から Paul Laurence Dunbar (1872-1906) までの長い系列は不毛の暗黒時代であったと云えよう。

第一次大戦の勃発と合衆国の参戦はアメリカ産業の飛躍的な拡張をうながし、欧州移民の制限と白人労働者の戦線参加による産業界の深刻な人的資源の不足は、アメリカ・ニグロ人の全人口のうち9割を占める南部のニグロ人に大きな身分の変動を与えた。よりよき経済的、民主的機会を求めて彼らは北部大移住を始め、安価な賃銀と土地を有する南部の工業化に伴って、南部でも農村から都市へ、中世的農奴から近代的労働者へと移行していった。⁽¹⁾やがて北部移住者のなかから、ごく少数ながらじょじょに中産階級、知識階級への困難な途が切り開かれるようになった。

第一次大戦で味わった幻滅はアメリカ作家に既成価値を喪失させ、＜失なわれた世代＞の厳しい批判は＜上品な伝統＞に向けられた。物質文明の懐疑はフロイドの出現と相俟って、原始主義の憧憬になったが、奔放な原始性の

本能をもって放縱的な生活に耽るものと考えられたニグロ人は貴重な自由の象徴として彼らの目に映った。かくして1920年代の＜ジャズの時代＞が訪れたが、＜ジャズの時代＞そのものもニグロ人の生活と文化に対する関心を異常にそそった。白人たちの関心は、ニグロ人大移住によって1920年に20万のニグロ人を全土より集めていたニューヨークの黒人都市ハーレムにひかれ、所謂＜ハーレム・ブーム＞が起ったが、ハーレムはその地理的条件から必然的にニグロ文学、音楽、演劇の中心になる運命にあった。

アメリカの文学作品においては、これまでのディクソン、ページ流の歪曲された「ニグロ像」に代って、共感と理解のこもった作品が、オニール、リンゼイ、ヘイワードらによって書かれたが、真面目な白人読者数の増加と、形成されつつあるニグロ読者層の需要は、ニグロ作家にもはじめて出版の機会を与える条件となった。

ニューヨークのハーレムを中心に、一名＜ハーレム・ルネッサンス＞“Harlem Renaissance”とも呼ばれるニグロ文化の興隆期、ニグロ・ルネッサンスは、20年代の音楽劇、演劇の面におけるニグロ人の著しい進出ぶりを重視して、一般に「シャフル・アロング」“Shuffle Along”⁽²⁾の開幕をもって始まり、そして大恐慌とともに終ったと解されている。アメリカ文学史上、1912年の新詩運動、ほぼ同時期の南部文学、20年代の小説にも、しばしばルネッサンスという言葉が冠せられていることを考えると、ニグロ・ルネッサンスも多分に便宜的な他動的な名称である。

しかし、それまでのニグロ文学者と異なって、ルネッサンスのニグロ作家を特徴づけたものは彼らが「新しいニグロ人」“The New Negro”の意識に支えられていたことである。アンクル・トムの態度を表わす「古いニグロ人」“The Old Negro”は従来の生殺与奪の権を白人に握られていたニグロ人が自己防衛の上からやむなくとった仮態であったが、「古いニグロ人」から発展した B. T. Washington の従属と妥協の思想が20世紀の始めには、ニグロ大衆の間に指導的勢力を持ち、一方ニグロ文化は親文化への模倣と従属と同

化を指向する特権的なミュラットウの伝統が支配的であった。

ニグロ人の身分の変革に加えて、「新しいニグロ人」としてその自覚に大きく作用したのはニグロ兵の第一次大戦参加と Marcus Garvey の「ガーヴェイ運動」“The Garvey Movement”「有色人種地位向上全国協会」“N. A. A. C. P.”の三つであった。「ガーヴェイ運動」と「有色人種地位向上全国協会」は、その方向はまったく異なっていたが、それぞれ労働階級と知識階級の間に民族の団結と、文化的遺産への誇りを滲透せしめた。特に後者を組織した W. E. B. DuBois は B. T. Washington に代る新しい時代の指導者として、ニグロ人の精神的解放に大きな役割を果たした。また N. A. A. C. P. の機関誌 “Crisis” は「全国都市連盟」“The National Urban League”の “Opportunity” 誌とともに、若いニグロ作家に門戸を開放して、ニグロ文学の育成に貢献した。

「新しいニグロ人」のエリートの作家たちは新しい都会環境のなかからアメリカ社会順応の態度を捨てて、ニグロ人の誇りと、自信、独立心を抱くに至った。やがてこの集団の意識は新しい文学によって必然的に究明され、高揚される運命となった。

ニグロ・ルネッサンスの時代のニグロ文学は小説と詩において優れたものが多い。日本では未だあまり知られていないこの時代の主な詩人たちの人と作品を、以下簡単にとりあげてみよう。

James Weldon Johnson (1871-1938)

Johnson はフロリダ州初のニグロ人牧師を母に Jacksonville に生まれた。ニグロ大学で有名なアトランタ大学を卒業し、弱冠23才で州立小学校の校長となり、その傍らニグロ人の新聞を発行しニグロ人で初めてフロリダ州の弁護士試験に合格した。1901年歌手の弟 Rosamond とともにニューヨークに出て、オペレッタやミュージカル・ショウの作詩や脚本を受持ち、また流行歌作者としても名を馳せて、後年のニグロ劇隆盛の因をつくった。1912年に

は ‘passing’ をテーマに小説「元黒人の自伝」“The Autobiography of an Ex-Colored Man”を書き、匿名で出版した。この作品は Dunbar, Chesnutt の出現以来20世紀初頭のニグロ文学不作時代にあって唯一の光彩を放ち、小説の分野におけるニグロ・ルネッサンスの前ぶれとして意義深い作品である。1906年セオドア・ルーズベルトの選挙運動を手伝ったことがきっかけで1913年までニカラグアとヴェネゼラの合衆国領事を勤め、その余暇を利用して綴った詩が1917年「50年その他」“Fifty Years and Other Poems”として出版された。音楽、文学、政治、法律等驚くべき多才を発揮した彼は、N. A. A. C. P. の目にとまり、1916年、執行委員長の要職についた。以後15年の永きにわたって社会的差別、暴行、リンチ事件と戦って、ニグロ人の社会的地位向上に当った。その間1922年「アメリカ・ニグロ人詩集」“The Book of American Negro Poetry”を編集、1925年「アメリカ・ニグロ人霊歌集」“The Book of American Negro Spirituals”、翌年「第二アメリカ・ニグロ人霊歌集」“The Second Book of American Negro Spirituals” 1927年「神のトロンボーン、ニグロ説教詩7篇」“God’s Trombones: Seven Negro Sermons in Verse”、1930年詩集「聖ピータ復活日の出来事を語る」“Saint Peter Relates an Incident of the Resurrection Day”を発行した。1925年には文学賞「スピングーン・メダル」を与えられた。1938年自動車事故で不慮の死に会った。

校長時代にジャクソンヴィルの学童のために書いた「みな声をあげてうたおう」“Lift Every Voice and Sing”は、ニグロ人は暗い過去を通して今新しい時代の夜明けに立っている、神を信じて勝利を得るまで行進せよとニグロ人を鼓舞したものである。最初の数行を除き、説教臭く、冗長で、良い出来栄の詩ではないが、弟の Rosamond によって作曲されるや、全国に拡がり、アメリカ・ニグロ人の頌歌となって、今日でもニグロ教会などで歌われている。第一次大戦後、ニグロ人の民族意識が歌に共感を覚えたからであろう。ニグロ・ルネッサンスの黎明を告げるものであった。

ダンバーと親交があった彼は、詩作の初期に「おまえが行ってしまっから」“Sence Yon Went Away”のような優れた方言詩も残したが、ニグロ方言詩は避けるべきだと主張した。

“This land is ours by right of birth,/ This land is ours by right of toil; /
We helped to turn its virgin earth, / Our sweat is in its funeral soil.”

これは長詩「50年」の一部である。この詩は1917年、南部のニグロ人の北部都市への移住が頂点に達した時世に出たものであるが、第一次大戦に至るまでのニグロ人の苦難の歴史を述べ、アメリカへのニグロ人の貢献を語り、当然の報酬を要求したものである。伝統的な詩形を使った技巧的な作であるが、これまでのニグロ詩に比を見ない知的な内容と抑制された情熱がかって抗議に力強い効果を表わしている。

しかし Johnson の最高の傑作は「ああ、名も知れぬ黒き詩人たちよ」“O Black and Unknown Bards”であろう。“O Black and unknown bards of long ago, / How came your lips to touch the sacred fire? / How, in your darkness, did you come to know / The power and beauty of the minstrel’s lyre?”

この作品は黒人霊歌の民衆芸術としての優秀さを讃え、それを生んだ名もない奴隷に驚嘆したもの。卑しい奴隷の産物であると知識人に唾棄されてきた「黒人霊歌」に新しい価値を求め、民族意識の昂揚の源としてそれを再評価した。

Johnson の「神のトロンボーン、ニグロ説教詩7編」も埋もれていたニグロ人の遺産を掘りおこし生命を与えたものである。古くからアメリカ南部に伝わるニグロ人牧師の説教に感動した彼は、ニグロ人の解釈する独特のバイブルの味を失なわずに詩にそれを再現しようと試みた。滑稽視される通弊を嫌ってニグロ詩の因襲であるニグロ方言を捨てて、平易なことばに真実と美をこめようとした点は注目すべきである。その一編「創造」“The Creation”では威厳を損なうことなく「創造」の物語りを展開している。同じく「葬送説話、くだり行け死の神」“Go Down Death, A Funeral Sermon”は死の床

に苦しむ女の子を隣れみ、神が死の神に命じて彼女を天上へ招く話である。

“And God said, Death, go down, / Go down to Savanna, Georgia, / Down
in Yamacraw, / And find Sister Caroline.

とさりげない言葉のなかにも詩的なリズムを含んでいる。

Johnson は詩作以外に上記の歌曲集「ニグロ人霊歌集」二巻の序文にニグロ人霊歌を紹介、再試価し、また「アメリカ・ニグロ人詩集」の序文においてニグロ詩人の文学史的評価を与えた功績は大きい。

Johnson の文学面における数々の業績は彼がルネッサンスの誇る作家たることの証明であると同時に、後につづくルネッサンスの作家たちに大きな影響を与え、彼の民衆芸術の発掘と、民族意識の覚醒はニグロ人一般に自信と勇気を与えたことと思われる。

Claude McKay (1891-1948)

ルネッサンス興隆期の主要人物である詩人、且つ小説家の McKay は西インド諸島ジャマイカの Clarendon の農家に生まれ、教育に理解ある家庭環境の下で育った。1911年20才で Jamaica の方言詩「ジャマイカの歌」“Songs of Jamaica” を出版、翌年アメリカに渡りタスキギー学園に入学したが、彼の叛逆的な精神が、この学校の教育方針になじまずに退学し、カンサス大学に学んだ。大戦中にハーレムに移り、種々の労働に従事して生計を立てながら詩を寄稿、“The Liberator” “The Messenger,” “The Crisis” 誌などに彼の詩はしばしば採用された。1920年英国に滞在中、ロンドンで詩集「ニュー・ハンプシャーの春」“Spring in New Hampshire” が出版され、アメリカに帰った1920年「ハーレムの影法師」“Harlem Shadow” を出版した。その後ソビエト、ドイツ、フランスを廻り、ソビエトでは革命理論を学んだ。1928年ニューヨークのニグロ人を題材に小説「ハーレムの帰還」“Home to Harlem” 翌年マルセーユを舞台に「バンジョー」“Banjo” を書いた。他に自叙伝「ふるさと遠く」“A Long Way from Home” (1940), 「ニグロの都・

ハーレム」 “Harlem: Negro Metropolis” (1940), がある。ニグロ・ルネッサンスの *lénfent terrible* と呼ばれるこの詩人は「新しいニグロ人」の意識を最も強烈に、勇敢に詩におり込んだ。第一次大戦後アメリカ各地で次々に発生した反動的な人種暴動に対し、McKay は一連の作品をもって反撃し過去の弱々しい奴隷根性への袂別を明示した。「リンチ」 “Lynching” はリンチの行われた翌日、ぞっとするような死体が日の光に揺れている現場へ人々が群る。“.....and little lads, lynchers that were to be, / Danced round the dreadful thing in fiendish glee” とその残忍さを描写している。

ソネットでつづった「避けられぬ死に」 “If We Must Die” は「新しいニグロ人」の闘争的な民族精神を最も著しく表わしたものである。“If we must die, let it not be like hogs / Hunted and penned in an inglorious spot で始まり, Like men we'll face the murderous, cowardly pack, / Pressed to the wall, dying, but fighting back!” で終るが、心の奥底にうっせきしていた民主主義のみせかけへの憤りは、リンチを呼び迫り来る暴民に象徴される民主主義の不正の姿に、恐怖は何時かかき消されてしまい、これまでのニグロ詩には無かった荒々しい抵抗の姿勢がとられている。

もう一つのソネット「白人鬼に」 “To the White Fiends” では “Think you I am not fiend and savage too? / Think you I could not arm me with a gun / And shoot down ten of yon for every one / Of my black brothers murdered, burnt by you?” と云う。憎悪が燃えさかり、恐ろしいほどに怨恨の響きがこもっている。絶望的な叫びではあるが、民族の自覚はこの作のなかの..... Am I not Africa's son, / Black of that black land when black deeds are done に見ることが出来る。彼のこの意識はハーレムのダンサーや労働者など、ニグロ人の下層階級の人々に対する同情と理解になり、「ハーレムの影法師」で夜の女をば “The sacred brown feet of my fallen race” とうたっている。

厳しい現実を鋭い眼で批判する McKay は主として「ニュー・ハンプシャ

一の春」 “Spring in New Hampshire” に収められている多くの作品のなかでは、殆んど別人のように、西インド諸島への郷愁を唱う夢想家である。「ニューヨークの熱帯」 “The Tropics in New York” では商店の飾窓に西インドの果物を見て、昔を想い起し、「炎の心」 “Flame-Heart” では “I have forgotten much, but still remember / The Poinsettia’s red, blood-red in warm December” とジャマイカの若人の喜びを追憶する。長篇の田園詩「二つと六つ」 “Two an’ Six” はジャマイカ方言で綴ったもので、単音節の言葉が軽快なリズムに溶けこんで、陽気に朗らかにジャマイカの田園生活の魅力を語る異色作である。

Countee Cullen (1903–1946)

メソジスト教会の牧師を父にニューヨーク市に生まれた。当地の高等学校在学中から詩才は認められていたが、ニューヨーク大学を卒業した1925年22才の若さで詩集「色」 “Color” を出版、批評家たちの絶讃を博し、「ハーマン・ゴールド」文学賞を受賞した。「色」は彼の処女作であるとともに、彼の最良の詩集と評されている。翌年ハーバード大学で M. A. の称号を取り、1927年詩集「褐色の少女の唄」 “The Ballad of the Brown Girl” と「赤銅色の太陽」 “Copper Sun” を書き、同年アメリカ・ニグロ人よる詩を集めた「うたうたそがれ」 “Caroling Dusk” を編集した。1929年には「くろいキリスト」 “The Black Christ” を出版したが、ニグロ・ルネッサンス後も詩作の筆を絶たなかった。死後自選の詩集「ここに私は立つ」 “On These I Stand” (1948) が出版された。

Cullen は英文学の素養が深く、古典的な英国詩の伝統を継承する敍情詩人である。ルネッサンス時代のニグロ詩人のなかで最もすぐれた技巧を持つ詩人として、古い詩形に依りながらも新鮮な美しさを常に漂わせている。彼の詩に感じられる磨かれたリズムと知性は他のニグロ詩人に比を見ないものである。

Cullen にとっては美を詩に表現することが彼の生命であった。詩聖キーツに捧げた詩、「春の詩人、ジョン・キーツに寄す」“To John Keats, Poet, at Springtime”で Cullen は移ろい易い春のはかなさに人間の生命のはかなさを想い，“John Keats is dead.” they say, but I / Who hear your full insistent cry / In bud and blossom, leaf and tree, / Know John Keats still writes poetry”と＜美の体現＞であるキーツに理想像を求め、その永遠の生命を讃えている。キーツを理想とする Cullen は＜ニグロ詩人＞ではなく単に詩人として芸術を追求しようとした。彼はニグロ人だと考えられることを嫌い、「自分の名声を支える人種的な考慮を望まない」と語ったが、これはニグロ作家に対する批評と評価につきまとう、偏見を嫌ったことを表わすものであると同時に、ニグロ文学に大きな比重を占めている社会意識の濃い人種のテーマからも逃れたいという気持を表明したものである。しかしニグロ人として生きることの意味は多感な Cullen の全存在を根底からゆさぶるものであった。「出来事」“Incident”の作に語られる幼き日の人種的な体験は生涯彼の心にこびりついた。「それでもおどろく私」“Yet Do I Marvel”で全能の神の不可思議な業に、深い信仰を抱きながらも“Yet do I marvel at the curious thing: / To make a poet black and bid him sing!”と結び、運命の皮肉と、詩人がニグロ人に生まれたことの悲劇を語る。「キレネのシモンは語る」“Simon the Cyrenian Speaks”で At first I said “I will not bear / His cross upon my back; / He only seeks to place it there / Because my skin is black”と歌っている。皮膚が黒いということのみで、神は十字架を、彼の意見に反して、その背に負わせたのである。宿命的なニグロ人の身分に対する Cullen の嫌悪、幻滅、焦燥、苦悩の経験は深められ、高められて、作品のなかに溶けこんでいった。ニグロ民族に呼びかけたと解される「黒い塔より」“From the Dark Tower”は “We shall not always plant while others reap / The golden increment of bursting fruit, / So in the dark we hide the heart that bleeds, / and wait, and tend our agonizing

seeds” とうたっている。

ルネッサンスの他の作家のように、彼はアフリカについても歌わざるを得なかった。長詩「遺産」“Heritage” は、他の作家のように民族意識の根源をアフリカの文明に求めようとはせず、妖しく騒ぐ詩人の血に、アフリカの神秘を感じ、自分にとって、アフリカの血が何を意味するか模索しようとする。父祖の幻影を求めてジャングルを思索しながらさまようその姿は、背景である狂熱的な原始的なアフリカの雰囲気と奇妙な調和をかもし出している。Cullen が辿りついたアフリカの血の意味は彼に一つの哲学を与える。

“Quench my pride and cool my blood, / Lest I perish in the blood. Not yet has my heart or head / In the least realigned / They and I are civilized.”

自分は精神も頭脳も civilized ではないと視た Cullen はアフリカの誇りと血を冷却する立場を選んだ。McKay は社会の不正を憤り、Hughes は大衆のなかに連帯意識を発見し、ニグロ人の意識と誇りを、ともに情熱的に歌いあげたが、Cullen にとってはニグロの血は社会的なものではなく、むしろ人種的な血の問題として扱った。この態度は McKay や Hughes と異なり、対象との間に、ある距離を保つ冷静な客観的な把握を与えた。複雑な人種問題をしばしば「白色」や「黒色」の世界に還元し、象徴的な手法で「タブロ」“Tableau” や「褐色娘の死」“A Brown Girl Dead” のように鮮明なヴィジョンを描き出した。

“Locked arm in arm that cross the way, / The black boy and white, / The golden splendor of the day, / The sable pride of night.” (Tableau)

彼の人種への態度は「碑文三篇」“Three Epitaphs” のなかの一篇「私の知る婦人に寄せて」“For a Lady I Know” に窺えるように痛烈な皮肉に昇華されている。

Jean Toomer (1894-)

上流階級のニグロ人を両親にワシントン D. C. に生まれた。ウィスコン

シン大学、ニューヨーク市大学に学び、1918年作家になる決心を固め、詩、短篇小説の筆をとり、その作は“The Double Dealer” “The Dial” “The Liberator” “The Crisis” 誌などに掲載された。1923年「さとうきび」“Cane” を出版、1926年にフランスのフォンテンブローの ‘Gurdjieff Institute’ に加わってその思想的影響を受けた。その後 “passing” を実行してハーレムから消息を絶った。

寡作の Toomer は短篇小説、スケッチ、詩をあつめた「さとうきび」一作によって不朽の文学上の生命を残すものである。R. A. Bone は小説「さとうきび」をライトの「ネィティブサン」“Native son” とエリソンの「見えない人間」“Invisible man” に比肩し得るニグロ小説の最高作だと激賞している。⁽⁴⁾ 詩情に溢れるジョージアの描写に、Toomer の詩才を知ることが出来る。「南部の子の歌」“Song of the Son” は奴隷の魂が浸みこみ、今なお奴隷の魂の歌をやさしく歌う南部の樹に、南部の子である自分が帰ることを告げる詩である。“....., for though the sun is setting on / A song-lit race of slaves, it has not set; / Though late, O soil, it is not too late yet / To catch thy plaintive soul, leaving, soon gone, / Leaving, to catch thy plaintive soul soon gone.” 恐らくこのすぐれたリズムにニグロ民衆の生んだ音楽が感じられるであろう。Toomer の自己発見はルネッサンスの一つの特質でルネッサンスによって生まれたものであり、その一つの大きな成果が彼によって果されたのである。

Frank Horne (1899-)

ニューヨークの生まれの Horne は異色ある経歴の持ち主である。ニューヨーク市大学卒業後、コロンビア大学とサウスカロライナ大学の大学院で検眼学を修め、シカゴ及びニューヨークでしばらく検眼師となったが、その後ジョージア州の Fort Valley で高校の教師をしながら詩を書いた。1925年「ある自殺者のそばに見つかった手紙」“Letters Found Near a Suicide”が“Crisis” 誌の詩賞を獲得して注目を浴びた。

この作は題名の示すように、母や幼な友だち、恋人などに寄せた7通の遺書の形をとって、短い生涯を叙情的に回顧した作品であるが、後に Horne は「ある自殺者のそばに見つかった別の手紙」“More Letters Found Near a Suicide”を書き、前作より思索的に、生活の倦怠、恋と宗教の幻滅を語り、人生の偽りの酒を飲んで、よろめき歌いながら、墓場に急ぐという詩である。

Horne に取上げるべき作品は「のがれ得ぬ幻想へ」“To a Persistent Phantom”, 「黒ん坊、子供のための歌」“Nigger: A Chant for Children”「カトリック教会に栗色の二少年を見て」“On Seeing Two Brown Boys in a Catholic Church” などニグロ人の問題を扱ったものである。「黒ん坊、子供のための歌」は“Little black boy / Chased down the street — / “Nigger, nigger never die / Black face an’ shiny eye, / Nigger nigger nigger”の一節で始まる。次の各節で黒ん坊とはやされて路をおかけられる子供たちに、ハンニバル、オセロ、アタックス、ルーヴェルチュールなど、黒い英雄たちを讃え、次にキリストの受難を引用し、勇気とひたすらの忍従をニグロの子供たちに示している。「カトリック教会に栗色の二少年を見て」もこの世で地獄を知るであろう少年に、キリストの受難と同じ運命を見ると云う悲痛な響きのこもる詩である。

Horne は Countee Cullen に似た傾向の作者で、人生への暗い懷疑を鋭い知的なアイロニーに表現したが、Cullen と異なってイマジズムの影響を受け、用語は新鮮であり、鮮明な効果を伝える。

Fenton Johnson (1888-)

シカゴの生まれで、シカゴ大学卒業後、1914年処女詩集「ささやかな夢路」“A Little Dreaming”が出版されたが世の注目するところとならなかった。翌年「たそがれのヴィジョン」“Vision of the Dusk”, 1916年に「土の歌」“Songs of the Soil”の二つの詩集を書いた。その後雑誌の編集などをしていたがほどなく筆を絶った。「たそがれのヴィジョン」以来伝統的なニグロ

方言使用から自由詩に改め、詩形のみならず主題と用語の上でも実験を試みた。シカゴ詩人サンドバーグの影響が明らかに認められる。「うんざり」「Tired」「バンジョー弾き」「The Banjo Player」「緋い女」「The Scarlet Woman」などには1915年の自然主義的なマスターズの「スプーン河詞華集」の影響をとどめている。

彼の作品は形式にとらわれぬ口語調の自由詩「うんざり」や「緋い女」がすぐれている。“I am tired of work; I am tired of building up somebody else's civilization / Let us take a rest, M'lissy Jane / The stars mark our destiny. The stars marked my destiny / I am tired of civilization”これは「うんざり」の一部で、アメリカ文明へのニグロ人の貢献の主張と、その文明の享受の要求というニグロ人作家の主流から離れて、Fenton Johnsonはニグロ人たることに幻滅を味い、宿命的な絶望に陥っている。「緋い女」では白人なみの教育と、貧困とがもとで、男を魅する顔が元手である女性が操を売り、忘却の手段としてジン酒を浴びるように飲む。Johnsonの描くニヒルな人物に対して、しばしば黒人の指導者はこの見方を非難したとSterling Brownは云っている。⁽⁵⁾

Joseph Seamon Cotter, Jr (1895-1919)

詩人 J. S. Cotter, Sr. を父にケンタッキー州 Louisville に生まれ、早くから文才を現わした。Fisk 大学学生当時、結核におかされ若くして世を去った。病床にあって書いた作品が死の前年、詩集「ギデオンの軍勢」「The Band of Gideon」に集録、出版された。彼の作品は鋭敏な詩的感覚で素朴な素材な自由にこなししたものが多い。「新しいニグロ人」の抗議精神を端的に表現したものに「なんと答えられるか」「And What Shall You Say」と「くろいがゆえか」「Is It Because I Am Black」がある。“Brother, come! / And let us go unto our God.”に始まる前者は、神の審判を前にして白人の友は返答に窮するであろうと唱い、友の罪とニグロ人の無垢を強調する。この作品は

「新しいニグロ人」精神の民族態度を示すものであるが Jessie Fauset とは対照的に、飾り気のない素直な用句である。

Waring Cuney (1906-)

首都ワシントン生まれで、ハーワードとリンカン大学で音楽を研究したが、「失なえるすがた」“No Imazes” が1926年 “Opportunity” 誌の詩のコンテストで一位を獲得した。「失なえるすがた」は褐色の肥った女は輝く美を自覚しないが、椰子の木のもとで、はだを露わにして踊り、湖に照る姿を自分が見れば、その美しさを覚るであろうと歌ったもの。「悩める キリスト」“Troubled Jesus” 「はりつけ」“Crucifixion” 「懐妊」“Conception” などの極度に冗語を省いた素朴で単純な表現は、靈歌の色調を持ち、哀愁を湛えている。

Jessie Fauset (?)

ニューヨーク州 Snow Hill の恵まれた家庭に生まれペンシルバニア大学卒業後、パリに学んだ。「忘却」“Oblivion” を筆頭に、フランス領西インド諸島のニグロ詩を巧みに翻訳した作品も残している。数年間 “Crisis” 誌を編集しニグロ文学の育成に尽し、またハーレムに文学的サロンを開き、若い文学者を育てた。彼女はむしろ小説家として名を知られ 1924-33 年に「混乱がある」“There Is Confusion” など 4 冊を書いた。彼女の詩は形式を重視するが軽快な筆である。代表作「とかく浮世は」“La Vie C’Est La Vie” の “But he will none of me, nor I / Of you. Nor you of her. ‘Tis said / The world is full of jests like these. — / I wish that I were dead” のように男女の愛情を扱い、愛する女の悩みを歌うが、厭世的なメランコリーな色調を帯び、且つニグロ人的性格は姿を消している。一方では、また激しい差別抗議の作品を残している。「五旗」“Orifamme” 「このままで」“Status Quo” はともに<ジム・クロウ>の攻撃の詩であるが彼女のフランス文学への素養を示す「こ

のままで」の洗練された皮肉と諷刺は、むきだしの憤りよりも効果的である。「五旗」は＜地下鉄道＞の指導者 Sojourner Truth を讃えた短詩であるが、ニグロ民族の母としてこの英雄を仰ぎ、自由を求めて強く戦わんとするもので、その高揚したトーンは彼女の他の作品に見られないものである。

Angelina Weld Grimké (1880-)

ボストン生まれの女流詩人 Grimké は北部の各地の学校に学び、1902年から僧職に入り、1916年ワシントンの “Dunbar High School” の英語教師をするかたわら、多くの詩を書き、「冬のたそがれ」 “Winter Twilight”, 「土の上に緑が横たわる時」 “When the Green Lies over the Earth” の代表作を残した。彼女の戯曲「レイチエル」 “Rachel” は上演（1916）され、出版（1921）された。

Grimké の知的でデリケートな感受性に富む整った自由詩は E. S. V. ミレーを思わせる。夕暮、夜、冬、死などを静かな絶望を抱いて歌う。パウンドやロウエルの主唱した「イマジズム」の影響が著しく見られる詩人で、人種の問題をテーマにはしていないが、「暗影」 “Tenebris” 「黒い指」 “The Black Finger” の作品は、ニグロ人意識と厳しく象徴していると思われる。「暗影」では一本の木が夜が来ると影になる。その影は長い黒い指を持った大きな黒い手で、白人の家に忍びより、その家の練瓦のへいをもぎとろうとする。「黒い指」では細っそりと立っている糸杉が金色の空につつ立っている姿を、空を指さす黒い指とみる極めて暗示的な作品である。

Ann Spencer (1882-)

ヴァージニア州 Lynchburg の女流詩人で「シュューシャンの宴を前に」 “Before the Feast of Shushan” 「カーニバルにて」 “At the Carnival” 「ダンバー」 “Dunbar” などの作で知られる。寡作であるが秀れたものが多い「シュューシャンの宴を前に」は古都シュューシャンの栄華を極めた昔に想いを馳せ、

その宮廷に理想郷を夢みる神秘的な作品、「カーニバルにて」では汚濁と腐敗のカーニバルの雰囲気の中に、サーカスの一小女に水の精の如き美しさを発見して、それを讃えたもの。両作とも伝統的な形式を尊重しているが、新鮮な語感と鋭い観察力によって、鮮かな色彩を持つ感覚的な美を浮び上らせる。しかしこの詩人は故郷ヴァージニア州の自然をうたったものが多く、自然の世界に安らぎを覚える Spencer はニグロ詩人のなかでユニークな位置を占めるものである。

Georgia Douglass Johnson (1886-)

ジョージア州アトランタの生まれで、そこで教育を受け、作曲家になる決心を翻して教師になった。夫の赴任先ワシントンに移り、夫の死後労働省の官吏になった。出版された詩集に「女心」“The Heart of a Woman” (1918) 「ブロンズ」“Bronze” (1922) 「秋は移ろいやすいもの」“An Autumn Love Cycle” (1928) がある。「ブロンズ」には「ヘジラ」“Hegira”「オクトルーン」“The Octoroon” 「他国者」 “Aliens” など人種的テーマも書いているが、得意のテーマは女性の愛情であり、青春と美の衰えにおののく女心である。「若き日」‘Youth’ の “The primrose moments, lush with bliss, / Exhale and fade away, / Life may renew the Autumn time, / But nevermore the May!” のように純粹に伝統的な形式に自らを限定しているが、効果が印象的であるのは、自然な衝動と感情を、まったく飾り気のない素直さで歌うからであろう。

Arna Bontemps (1902-)

今なお文学者として、またニグロ人文化の紹介者として Langston Hughes とならんで、華々しく活躍している。Bontemps は詩人としてもすぐれた作品を書いている。「ゴルゴタは山」“Golgotha Is A Mountain” は1926年「アレキサンダー・プーシュキン」詩賞を受賞、翌年「ベテスダのノクターン」

“Nocturne at Bethesda” に再び同賞を獲得した。「ベテスダのノクターン」は深い傷を負って横たわるニグロ人にベテスダの泉が動こうとしないのを見て、ベテスダにニグロ人種と共通の運命を見出す象徴作である。“The golden days are gone. Why do we wait / So long upon the marble steps, blood / Falling from our open wounds? and why / Do our black faces search the sky?” 「ゴルゴタは山」ではアフリカの失なわれた文明の遺産を強調し、「帰還」“The Return” ではニグロ人の魂のふるさととしてアフリカにノスタルジアを感じる。彼女が好んでうたうのは、太陽の燃える原始のアフリカではなく、薄明りに暮れゆくアフリカへの思慕である。ニグロ人は Bontemps に「自分を見失って、見知らぬ土地にさ迷える者」と映じる。この詩人は時に自由詩をとるが、常に感情を抑制し、瞑想に耽り、丹念な技巧をこらす。

1925年 Alain Locke は「新しいニグロ人」について「ニグロ人は人生に対し客観的態度をとり、模倣と劣等心理を振り落とし、精神的解放をなし遂げ⁽⁶⁾た」ことを述べている。Langston Hughes は1926年 “Nation” 誌に「われわれ若いニグロ芸術家は、今や恐れず堂々と黒い皮膚を持つ自己を表現するつもりだ。もし白人が喜ぶならば我々は嬉しい。彼らが喜ばなくとも、その不快も同様、意に介しない。我々は、自らその強さをよく知っている塔を、明日のために建て、我々の心は自由に山の頂きに立つ。」と精神的解放をなし⁽⁷⁾たニグロ人の文学宣言を行った。

「新しいニグロ人」の精神は、アメリカにおける奴隷時代の民衆文化、アメリカ・ニグロ史の英雄と英雄的事件、アフリカの過去の文明などを再評価し、それに誇りを求めることにより、ニグロ人としての自己の存在と意義を認識しようとするこの時代の多くの詩人たちの態度になって表われている。そしてこの態度は、Johnson, Hughes を頂点としてニグロ文学の主流をなしてきた詩人たちに、ニグロ大衆との連帯意識を深め、彼らに対するよりよき理解を示す作品を生む結果となった。アメリカ社会のニグロ人への不正に対する

攻撃は厳しさを加えたが、それまでのドグマチックな抗議は姿を消し、技法は洗練され、表現は深みを帯び、文学的にすぐれたものになって、次の社会主義文学の時代に入るのである。

一方 Locke の云う精神的解放が「新しいニグロ人」意識を内包する姿勢とはならないで、ニグロ文学の伝統に根ざしながらも、まったく逆の方向をたどる詩人たちが始めてこの時代に現われた。Cullen, Toomer, Horne らのニグロ詩人としての自己啓示は、彼らに芸術至上の態度をとらせた。ニグロ人の文化的二重性に加えて、深まりつつあるニグロ大衆との断層は、彼らを懷疑、不安、絶望に追いこんだ。この傾向は今日の実存主義のニグロ作家たちに受けつがれ、彼らの作品に濃い影を宿している。

附記 Langston Hughes (1902-) の項と、とりあげた詩の邦訳は紙面の都合で本文から省いた。

- (1) S. Nearing "Black America" (p. 71) のなかで、1916年から1928年の間に120万のニグロ人が都市に移住し、都市のニグロ人口は32.6%増加したと云い、R.A. Bone の "The Negro Novel in America" (p. 53) には200万のニグロ人が農場を後にして工場に向かったと述べている。
- (2) 脚本、演出まですべてニグロ人の手によるミュージカル・ショウで、1921年夏ブロードウェイで開幕、大喝采のうちにロングランを重ねた。
- (3) S. A. Brown, A. P. Davis, U. Lee (eds.), *The Negro Caravan*, p. 281.
- (4) R. A. Bone, *The Negro Novel in America*, p. 81.
- (5) S. C. Watkins (ed.), *Anthology of American Negro Literature*, p. 244.
- (6) S. A. Brown, A. P. Davis, U. Lee (eds.), *The Negro Caravan*, p. 949-959.
- (7) A. L. Locke, *The Negro in American Culture*, p. 102.

参 考 文 献

- Bontemps, Arna (ed.):** *Golden Slippers*. New York, Harper and Brothers, 1941.
- Brown, Sterling A., Daris, Arthur P., and Lee, Ulysses(eds.):** *The Negro Caravan*. New York, Citadel, 1941.
- Hughes, Langston and Bontemps, Arna(eds.):** *The Poetry of the Negro 1746—1949*. New York, Doubleday, 1956.
- Johnson, James Weldon (ed.):** *The Book of American Negro Poetry*. New York, Harcourt, Brace, 1922.
- Watkins, Sylvestre C. (ed.):** *Anthology of American Negro Literature*. New York, The Modern Library, 1944